

腕時計を所持しない永平寺の雲水

——それは『速度の文化』を批判する——

成興寺住職 小倉玄照

十年一昔という古人の歳月觀からすれば、私が永平寺を送行して一昔以上、むしろ二昔と言つた方がよいほどの歳月が経過した。はるかな彼方に過ぎ去つた永平寺の生活について記憶の糸を手繕りながら光陰は矢の如しの思いが募つてくる。

それにしても、永平寺で過ごした六年間は、毎日がまことにゆつたりと進行していた。曉闇

三時半（冬は四時半）の覚醒から始まる一日は、あわただしさとは無縁のものであつた。それは、金山の大衆に要所要所で時を知らせる大梵鐘の音が、まことにゆるやかな波長で人々の心に浸み込んで行く様子に象徴されると言つてもよからうか。夜九時、二時間になんなんとする夜坐が終わつて開枕（就寝）を知らせる大梵鐘の音が、ぬばたまの夜の静寂の底から湧き出す

るよう、低音に響いてくると、私は正直などころ、ああ、やつと今日も一日が終わつたか、という感慨に催されるのが常であつた。

一週間、日がな一日、坐禅に明け暮れる臘八ろうはつ大摂心会（十二月）や、涅槃会ねはんえ大摂心会（二月）ともなれば、時間の進行がピタリと止まつてしまつたのではないかという気にすらなる。三時（朝・昼・夕）の大梵鐘を聴きながら、一分そ

こそこしかないはずの一聲一聲の余韻と、それが途切れた後の静寂じまが悠久の長い時間のように思われたりしたものである。

それにひきかえ、永平寺を送行した後の歳月の経過の速さは何としたことか。あつという間に一週間が経ち、一年間が過ぎ去つて行く。この調子では、私の人生の終焉しゅうえんの日も指呼の間に迫つているようで恐ろしくさえある。

永平寺に於ける悠久な時の流れと、娑婆しゃばの生活における鳥兔うどぞう匆匆と言つてものろましくおも

われるほどの性急な歳月の経過ぶりとの差は、これはいつたいどうしたことか。どこにいつたい原因があるのか。

そんなことを思つていたら、朝日新聞（平成六年十一月九日付、大阪版）の「世紀末通信」に清水克雄氏が、フランスの歴史家コルバンに対するインタビューをまとめていて、なるほどと膝を叩いた。

現代の社会を支配しているのは『速度の文化』だとするコルバンは、次のように言う。

「昔はどこの国でも時間は宗教家が管理するものでした。時間を知らせるのは鐘の音だったのです。時間は集団のもので、個人の時間というのも存在しないものでした。それがいまでは、時間は一つではなく、いくつもの時間が重層的に存在するようになつています。こうした時間感覚は、人間が過去に体験したことがないことなのです。」

そう言われてみれば、永平寺の雲水は、腕時

計をつけていない。時間は、永平寺のものであつて、個々の雲水のものではないということであろう。永平寺には、コルバンのいう『速度の文化』に支配され始めた近代以前の中世的なゆつたりとした時間が化石のように存在しているのである。

それに対しても婆の一日は、あつという間に過ぎ去つて行く。早く移動しようという欲望にふりまわされているがゆえにそうなるらしい。

そう言えば、ひょんな因縁によつて三年ほど前私は自動車の運転免許を取つた。過疎の山村で保育園の経営などをしていると、自動車がなければどうにもならなくなつて来たせいもある。

ところが、一旦、自動車を運転し始めた途端、忙しさが倍増したように思える。時の流れに加速度がついてしまつた感すらある。とにかくごろは目の回るほどの速さで一日が過ぎ去づ

て行く。

道元禅師は、『正法眼藏』有時の巻で、時間の問題について綿密な思索を展開しているが、その中に次のような一節がある。

「われを排列しおきて尽界とせり、この尽界の頭^ず物^もを時^じなりと観見すべし。物^もの相^あ碰^げせざるは、時^じの相^あ碰^げせざるがごとし。このゆゑに、同時發心あり、同心發時あり。および修行成道^{じようぢう}もかくのごとし。われを排列して、われこれをみるなり。自己の時なる道理、それかくのごとし。」

現代語に訳してみれば、およそ次のようにならうか。

「この現実世界はすべて自己」とのかかわりの中で存在するものだから、それは自己がかたちをかえて排列されているようなものだ。この現実世界の人や物を一々にすべて時と見なしたらよい。物と物とはたがいにさまたげあわないの



は、時と時とが相さまたげないのと同じである。

それゆえに、自己が発心すれば自己の周辺の人や物は同時に発心するし、周辺が発心すれば自己も同時にそうなる。道を求める心（発心）の問題ばかりではない。修行するという点についても、道をさとる（成道）という点についても同じである。自己を排列して、自己自身がそれをみるのだと考えればよい。自己が時そのものであるという道理は、まさにこのようなものである。」

これは要するに、時間のありようは、自己のありようによつて左右されるものだということを語つている。自己の状況が、「十二時（一日）の長遠短促」（有時）の感覚に影響を与えると道元禅師は仰せになつてゐるのである。

永平寺に身を投じた時、永平寺の時に自己は同一化する。それを道元禅師は「同時発心」と表現されたとみてよい。

婆婆に出て、腕時計をつけた途端に、時は自己そのものの支配下になる。自己が速度の欲望にふりまわされれば、当然に時はその速度に合わせて加速度をつけて早く経つ。それを「同心発時」というのかもしれない。

さて私は、せめて一週間だけでも腕に時計をつけないで過ごしてみたいと今思つているのだけれど、それはかなりむずかしいことのようだ。手帳に書き込まれたさまざまの行事予定や約束事がそれを許さないのである。

そういうわけで、永平寺の雲水が腕時計をつけることなく生活していることの意味の深さを私どもは自覚しなければならぬ。それは『速度の文化』に支配される現代社会を暗々裡に批判しているのだからである。